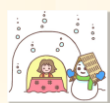


High School Human Rights

(高校人権教育通信 第 23 号) 平成 30 年 (2018 年) 1 月 22 日



発行 長野県教育委員会事務局 心の支援課

発行人 小松 容 (心の支援課長)

MAIL kokoro@pref.nagano.lg.jp

平和と公正をすべての人に —SDGs (16 番目)達成のために—

長野県内には、飯田・下伊那をはじめとして、様々な地域に「満蒙開拓団」や「満蒙開拓青少年義勇軍」の石碑があります。ひっそりと建つ石碑は、満蒙開拓をめぐる苦難の歴史を赤裸々に物語っているようです。

それは、「今日的な人権課題」につながる悲しい史実です。これらの理解を深め、人権教育をさらに進めましょう。



「満蒙開拓団」とは

「満蒙開拓団」とは、中国東北部に 1932 (昭和 7) 年から 13 年間だけ存在した「満州国」に日本全国から渡っていった農業移民の方々のことです。当時、疲弊していた農村の土地対策と人減らし、それにシベリアでのソ連からの防衛と現地軍隊への物資の供給といった軍事目的が合致し、国策として進められたものです。

開拓団として海を渡ったのは大人ばかりではありません。数え年で 16~19 歳の青少年も対象となり、「満蒙開拓青少年義勇軍」として参加しました。

「満蒙開拓平和記念館」の伝えること

長野県からは、全国で最も多くの「満蒙開拓団」と「満蒙開拓青少年義勇軍」の皆さんが「満州国」へ渡っていきました。日本と中国双方に多くの犠牲を出した満蒙開拓の史実を通じて、戦争の悲惨さ・平和の尊さを学び、次世代に語り継ぐとともに平和・共生・友好を発信することを目的として、平成 25 年 4 月、下伊那郡阿智村に「満蒙開拓平和記念館」が開館しました。これまで全国各地より延べ 13 万人を超える方 (平成 29 年末現在) が来館し、平成 28 年 11 月には天皇皇后両陛下も来館されています。

終戦とともに引揚げることになった開拓団の運命は悲惨なものでした。記念館が行った聞き取り調査もあり、長い間あえて誰もが触れず心の奥に閉ざしてきた事実が少しずつ知られるところとなってきました。

ある人権教育担当の先生のお話です。

館内には、運良く引揚げる事ができた方々の体験証言を綴った展示があります。

「野ざらし」「現地の暴動」「極寒の収容所」「集団自決」「石で額を殴り合う」と過酷な体験をされてきたことが容易にわかる見出しが続きます。何の罪もない子どもたちの命が目の前で簡単に奪われていった事実。我が子の命を自らの手で奪わなければならなかった事実。戦争という狂気の中で起こった悲劇について淡々と語られている一言一言には、思い出したくない出来事に日々向き合い生きてこられた方々が、それでも私たちに語り残そうとする強い決意を感じます。

それは「親としてこれ以上の苦しみがあるでしょうか。こんなことはもう二度と起きてはいけない。」という強い願いでもあると感じます。

湯澤政一さん（飯田市）（元義勇軍、現在語り部として活動）は語ります。

私は本を読んで満州にあこがれをもっていた。広大な土地へ渡りたかった。てっとり早く満州に渡る手段は義勇軍だった。なぜならば、体力検査も学科試験もなかったから。私は8人兄弟の3番目。貧しい家庭で育った。だから、どこへでも行けた。義勇軍にはそういう人が多く集まっていた。学校の先生は、貧しい家庭や未亡人の家庭に義勇軍への勧誘の声をかけていた。こうした人たちは簡単に「嫌だ」とは言えなかったから。自分のクラスでは「湯澤が行くなら、俺も行く」という仲間がいて、3名で義勇軍に志願した。先生は、何の苦勞もなく義勇軍募集の割り当てを突破していたわけだ。そのうちの1名はハルピンで亡くなってしまった。送り出すときは良かったが、きっと先生はその苦しみを背負っただろう。

昭和16年末時点での満州移住協会による調査「義勇軍に応募した動機別数」において、1位は「教師の指導による」となっています。教師には教育会から、義勇軍に送り出す割り当てがあったと言われます。少年たちは、満州で新しい国づくりに参加することはお国、故郷、家族のためになると、教師の指導を信じて満州へ渡って行ったのです。

もちろん、教師の中にも子どもを送り出さたくないと考えていたのに、それを止めることが出来なかった自分、教え子を遠くの地で死に追いやってしまった自分を責め、後悔している方も少なくありませんでした。昭和34年、上伊那教育会では、市町村会、義勇軍遺族会と共に多額の寄附金を集め、昭和36年4月、「平和を象徴する青少年の立像」を設立し『少年の塔』と命名しました。以降、毎年4月に慰霊祭を開催し、再び同じ惨禍を繰り返すことがないように確認し合っています。それは現在も粛々と続いています。



少年の塔（伊那市・上伊那招魂社）

義勇軍に加わった人、送り出した人、帰って来ることができた人、亡くなった人…みんなが戦争の被害者であり、それぞれの立場で受け止めるべき人権課題があります。ある人権教育担当の先生のお話です。

記念館の壁に記されている文章の一部を紹介します。

「長く人々の心の奥に閉ざされていた記憶に寄り添い、向き合いにくい真実に目を向ける時がきました。この歴史から何を学ぶのか、私たちは問われています。「負の遺産」を「正の遺産」へと置き換えていくこと、その英知が私たちに問われています。」

ひとたび戦争が起きると国策という名の下に人権や人の命があまりにも軽く考えられてしまう悲劇が繰り返されてきました。…再び戦争を起こさないよう、人の命が何よりも大切なものということを見失わないよう、人権や平和について、教師、生徒ともに学んでいかななくてはいけないと思います。

その一つの機会として、ぜひ「満蒙開拓記念館」に足を運んでみてください。

- (注1) 満蒙開拓平和記念館のパンフレットには、「当館の展示や資料では、『満州(国)』『満蒙開拓』、…などの用語を使用している箇所があります。これは当時使っていたことばをそのまま使用することで、その時代や人々の認識を読み取り歴史を検証していくためであって、これらを美化したり正当化しようとするものではありません。」と書かれています。本稿も同様の考えで用語を使用しています。
- (注2) 平成30年3月下旬に、終戦後旧満州に取り残された150万を超える日本人の帰国を実現した戦後秘話を扱った特集ドラマ「どこにもない国」がNHKで放映されるそうです。
- (注3) 阿智村は、人権教育総合推進地域事業（文部科学省 平成27～29年度）の指定を受けて「～村民劇プロジェクト～たんぼの花」をはじめとする、学校、家庭、地域社会が一体となった人権教育の総合的な取組を進めています。
- (注4) “2030年までに貧困に終止符を打ち、持続可能な未来を追求しよう”。「持続可能な開発のための2030アジェンダ（行動計画）」が2015年9月に国連総会で採択されました。そこに盛り込まれているのが、世界を変えるための17の目標「SDGs（エス・ディー・ジーズ）」。
- 途上国も先進国も含めた世界中の一人ひとりに関わる取り組みで、2016年1月から実施が始まっています。

(参考・引用文献)

- 「満蒙開拓平和記念館を訪ねて」（人権つうしん第47号 長野県教育委員会）
- 「満蒙開拓青少年義勇軍と教師の物語」（人権つうしん第52号 長野県教育委員会）
- 「人権教育リーフレット4『何があったの？—その問いから学びが始まる』」（長野県教育委員会）
- 『『前事不忘、後事之師』—前事を忘れず、後事の教訓とする—』（満蒙開拓平和記念館を訪ねて『教育指導時報』NO.771 教育指導時報刊行会）
- 「満蒙開拓青少年義勇軍」と「上伊那教育会」・「少年の塔」（『伊那路』第57巻第12号 上伊那郷土研究会）
- 「満蒙開拓平和記念館パンフレット」（一般社団法人 満蒙開拓平和記念館）

お知らせ 平成30年度 高校人権教育研修・連絡協議会

日時(予定)：平成30(2018)年5月31日(木)午後 会場：総合教育センター講堂（塩尻市）